

新たな地域文化の創造

～ 土別市民劇場の取り組み～

安川 登志男 (やすかわ としお)
土別市民劇場代表

地域演劇活動の始動

劇団春秋から土別市民劇場へ
「塩狩峠を北に向かって越えると、そこからは文化果つる地である。」と、地域で文化活動を展開する者自身が自嘲的に語る状況。それに反抗するように、20代の若者が中心になって、土別市で劇団春秋が産声を上げたのは、昭和49年('74)の6月だった。そして、同年11月にシャクシャインの乱を題材にした舞台で旗上げ公演を行ったが、800人収容のホールに観客はわずかに200人、しかも反応も思わしくはなかった。

公演を終えて、地域で演劇活動を続けていくためには、市民に多くの演劇作品に触れてもらうことも必要と考え、翌昭和50年4月に劇団春秋のメンバーを中軸として、35名の若者で、演劇鑑賞団体「土別市民劇場」を設立した。鑑賞団体と言っても会員組織を基本とせず、メンバーがチケットを販売するという方式を取り、同年5月から3年の間に、東京に拠点を置くプロ劇団の公

演を6回開催した。

最初は満席が続く順調な滑り出しだったが、3年を経過した時、団体の累積赤字は80万円に達していた。赤字分は銀行からの借り入れで補填していたが、返済の拠出に耐えきれず、メンバーは急激に減少していった。

「多くの市民に、他の劇団の芝居を観てもらうために、身銭を切るのは釈然としない。」という思いは、劇団春秋とのかけもちのメンバーに大きく広がり、昭和53年('78)の秋、それまで並行して活動を続けていた劇団春秋を発展的に解消して、土別市民劇場は自主公演活動と鑑賞活動を併せて行う団体として再出発し、現在まで50作品ほどの演劇公演と17回の鑑賞事業を開催してきている。

市民に愛される演劇 集団への模索

敬老会公演と児童劇の創作

昭和50年代は、まだ演劇は七面倒くさいものという見方が支配的であり、

私達自身も若さに任せて一人よがりの作品に取り組むことが多かったため、観客動員は思わしいものではなかった。

何とかして市民団体に認証され、愛される団体になりたいとの思いから、私達は昭和57年（'82）に市の敬老会のアトラクションとして「瞼の母」を上演。その後5回にわたって既成・創作を織り混ぜて、大衆演劇的な舞台に取り組んだ。

この時期の土別市民劇場の年間のスケジュールは、年2回の自主公演に加えて敬老会公演と鑑賞事業の開催と実にハードなものであったが、確実に団体の活動が、市民の間に親しみを持って受け容れられていくことが実感できた。

高齢者へのシフトの一方で、昭和62年（'87）には、地域の伝承として残る不動尊の滝の由来を題材とした児童劇を創作して土別おやこ劇場の地域例会で公演。2ステージで1,400名近い観客動員を果たした。公演終了後、しばらくの間、親子連れで滝不動を訪れる人が急増し、地域の伝承を題材にしたことで、「ふるさと再発見」という思わぬ副次効果を生んだことに言い知れぬ嬉しさを感じた。

市民参加劇への取り組み

構成舞台「恵水賦」

舞台芸術に関わっている市民も、そうでない市民も、各々ができることを持ち寄って市民参加の舞台を創り上げるということに深い関心を持ったのは、昭和54年（'79）に岩手県遠野市の市民の舞台“遠野ファンタジー”の存在を知ったためであった。遠野物語を題材として、脚本の公募、作曲、編曲、振付を含め、1年がかりで創り上げる市民の舞台に私は強く魅かれ、土別市における市民の舞台の実現に向けて各方面に働きかけをはじめた。そして、5年後の昭和59年（'84）土別市の黎明期からの歩みを、音楽や舞踊や演劇で市民参加で創造する構成舞台“恵水賦”という形でスタートさせることができた。

恵水賦の第1章と翌年の第2章は音楽・舞踊は既成の作品を使用したが、この取り組みを通じて、地域に詩・音楽・舞踊などさまざまなジャンルで、創作力を持っている人達が潜在していることを知り、第3章の「北の防人」、第4章の「豊饒の碑」、第5章の「見上げればあかね雲」は、脚本、作詞、作曲編曲、振付のすべてを市民のオリジナルで組み上げることができた。

市民参加劇の素晴らしさは、役者や

歌い手や踊り手や演奏者として参加するだけでなく、衣裳づくりのひと針や、装置への釘の1本、塗装のひと刷毛という形で、多くの市民が多様な参加のしかたで、一つの舞台に関われるということにある。

平成元年（'89）の総集編を含めて、6年にわたる構成舞台の取り組みは、それまで他のジャンルとはほとんど無縁であった地域の各種の表現活動に、相互交流の可能性を開いたと同時に、それまで舞台とは無縁であった多くの市民に、舞台創造への参画がさほど難しいことではないのだと意識させることができたという点で成果があった。

市民参加ミュージカル へのチャレンジ

構成舞台でのさまざまなジャンルの人達との出会いをベースにした「まだ何かやれる」という自信と、団体の寄せ集めから生じるさまざまな軋轢から解放され、出演者、スタッフがひとつになった舞台創造を実現したいという思いは、市民参加ミュージカルの製作へと私を駆り立てた。

丁度その頃、私は廃棄物行政の担当となり、もし、ゴミの立場で考えたらどうだろうという視点から、ゴミ達が

舞台上に登場する市民参加ミュージカル「ザ・スクラップス」を書き、平成5年（'93）3月、無論市民のオリジナル音楽で上演した。

この公演には、翌年子どもミュージカルを企画している土別おやこ劇場の呼びかけで、お母さん達数名と30名近い子ども達がキャストとして参加した。

翌年7月の土別おやこ劇場10周年記念子どもミュージカルへの取り組みは1年前からスタートした。ダンス・歌・演技などの基礎訓練と並行して、どんな題材にするか、どんなストーリーにするかという話し合いも子ども達を中心にして進め、最終的に子ども達の発想や意見を集約して、私が台本を仕上げるというプロセスを選んだ。子ども達相互の結びつきを深め、私達指導スタッフとの距離を近づけるため、宿泊研修という交流機会も稽古のプログラムに織り込んだ。

本番前の2週間程は、お母さん達は、ご主人に叱事を言われながらも夜遅くまで衣裳づくり。子ども達は連日9時過ぎまで稽古に集中。塾や習い事を休んでまで稽古に足を運んでくる子ども達。連日の稽古に疲れ発熱した子もいたが、国際家族年にちなんで家族の絆の大切さと、環境問題を題材にした子どもミュージカル「大きな忘れもの」は、50名の子ども達の躍動の余韻を残

して成功裡に幕を閉じた。

「ザ・スクラップス」と「大きな忘れもの」の2ヶ年連続でのミュージカル上演を通して私が出遭ったもの、それは子ども達の感性と表現力の素晴らしさである。そして、棒立ちで暗記した台詞を言うだけの幼稚園や小学校の学芸会（すべてがそうではないと思うが）とはまるで違った舞台創造に参加したという貴重な経験は、子ども達の将来に大きな意味を持つと思うし、現にこの2作品に参加した子どものほとんどは、中学や高校や地域で、文化活動のリーダーとして活動を続けている。こうした子ども達が、近い将来社会人として地域に帰って、演劇活動の中核を担ってくれることを願うと同時に、彼らの次の世代の子ども達にも彼らと同様に舞台創造への参画の機会を用意することを急がねばならないと思っている。

相次ぐ地域文化 ホール誕生と 文化行政のひろがり

90年代から、かつての住民福祉センターや公民館集会室に替る舞台創造・鑑賞空間として、地域文化ホールが町村を中心に相次いで建設された。

その多くは、自主文化事業を展開し、

道内外の音楽・舞台芸術の公演や、時には海外からの公演も主催して、かつては都市部に集中していた内外芸術家の公演や演奏が、「わが町、わが村」でも楽しめるようになったことは、住む地域の隔てなく、等しく芸術文化を享受する機会を得るといって歓迎すべきことである。

また近年、道や各財団等による鑑賞事業や創作活動への助成や地域文化ネットワークの推進、さらには表現や舞台技術の講習・ワークショップの機会の拡充など、鑑賞面でも創造面でも、支援のメニューは急速に豊富になってきている。

しかし、市町村によっては豊富なメニューが充分に把握しきれず、さらに住民側の受け皿を組織化できないというところも多い。演劇団体は永らくホールの使用方法等をめぐって、文化行政と衝突を重ねることが多かった。そして皮肉なことではあるが、文化行政の反抗と舞台製作場や稽古場さがしに窮々とするという苦しい活動状況が、一方で創造へのエネルギーをかき立てる方向に作用してきたとも言える。

文化行政が手厚くなったからといって、住民の文化活動が即座に活性化するわけではない。文化行政が住民の活動を丸抱えで支援してしまうと、そこには脆弱な活動しか生まれてはこない。

しかし、文化行政サイドは、常に広く情報を収集することに努めるとともに、住民サイドと適度な緊張関係を保ちながら、協働して地域文化活動を推進する専門の担当者の育成を図らなければならないと思う。

野外劇への憧憬

自然を舞台の中に取り込んで、劇場空間とは異なる劇空間を創造するというには、かなり以前から憧憬を抱いていたが、それが実現できたのは、平成7年（'95）の士別市民劇場創立20周年の「トロイアの女たち」においてである。

士別市内には、つくも山というかつては桜の名所であった小高い丘があり、その頂上には深い森に囲まれた士別神社の社がある。その拝殿の階と石段を舞台として、ギリシャ悲劇を上演したいという申し入れを、宮司さんは快く了解してくれた。

演劇は元来、祭祀との結びつきがきわめて強く、劇の場として鎮守の森は正に格好の場所である。

拝殿の蔭（しとみ）を開き、上手には高校生によるパーカッション・アンサンブル、下手には市内と近隣の天理教の青年による雅楽を配し、石段の両

側にはかがり火を焚き、客席は地元技能士会の協力を得て、階段状と平場を合わせて500人程度のものを特設した。

野外劇の最大の敵は天候で、本番前の2日間は夜に驟雨に見舞われ、リハーサルなしで本番を迎えることにはなかったが、公演当日は朝から抜けるような青空。日が暮れかかる頃から参道の両側に「士別市民劇場」と書かれたいくつもの提灯を灯して、異空間へのアプローチを演出した。

開演の7時半にはまだ少し明るさが残っていたが、陽が落ちるにつれて、拝殿や周囲の樹々が照明に浮かび上がり、かがり火や出演者の掲げ持つ松明の裸火も印象的で、雅楽の音に重なってギリシャ悲劇の朗々とした台詞が境内に響き渡り、観客は非日常的な時間の流れを満喫して、劇は終幕を迎えた。

野外劇への思いは止み難く、森の次は川へと照準を向け、平成11年（'99）には市内を流れる天塩川の遊水広場を会場に、堰堤の石段を客席として、中州に舞台を特設し、士別市開基100年記念・天塩川ライブシアター「朔北の鳴動」をキャスト、スタッフ総勢500名で上演した。川の対岸まで橋を架けるというプランは、所管官庁の許可が得られずに断念せざるを得なかったが、火や水をふんだんに使った舞台は、風

の流れの予測を誤ったものの、ある程度満足ゆく仕上がりであった。

構想からわずか4ヶ月。しかも本格的な稽古は1ヶ月余りという短時間で、大がかりな舞台が仕遂げられたのは、構成舞台や市民参加ミュージカルの経験がベースとなって、市民のエネルギーが短期間でロー・ギアからトップ・ギアにシフトアップできたからに他ならない。

住民参加劇の素晴らしさ

上川町と美深町での取り組みから

士別市における構成舞台・市民参加ミュージカルの取り組みの経験から、平成6年('94)には上川町の町民舞台「大自然とわがまち」の脚本・構成、平成10年('98)には美深町の町民劇場「天塩川流るる大地」の演出・舞台監督として、お手伝いする機会を得た。

共に町開基100年記念事業として、町の文化協会が中心となって創り上げた舞台だったが、上川町の場合は、現在のかみんぐホールが建設前で、会場が中学校の体育館、美深町の場合はオープン間もない文化会館コム100と会場条件の違いはあったが、住民参加劇にかける町民の熱情には並々ならぬものがあり、このふたつの舞台に共通して、劇そのものの感動に加えて、その

プロセスの中で、新たな出会いが生まれ、人々のつながりと地域への愛着が強まり、“まちづくり”へのエネルギーにも連関していくという住民参加劇の素晴らしさを改めて実感した。

上川町においては、他の町から数年前に嫁いできた女性が「今までは他者のようだったが、町民舞台に参加して、やっと町民になった。」と語っていたし、美深町においては、転勤族の青年が「町民劇場に出演した後、街で色々な人に声をかけられるようになった。住民登録だけではなく、“この街に生きている”という実感を得られたことが嬉しい。」と語っていた。

また、両町において沢山のお年寄り達も出演したが、「孫に自分の舞台姿を見せられたことは大変な喜び」「孫と一緒にの舞台に立てるなんて夢のようだ。」という充ち足りた感想にも触れることができた。

ひとつの舞台を創り上げていく過程では多くの問題も生じ、神経も苛立ち、些細なことでぶつかり合いも起こる。さらに幕が開いた後ですら、不測の事態が発生し、その対応に右往左往する場合もある。しかし、それらの問題について共に苦しみ、共に乗り越え、最後に共に喝采を浴びた時、日常生活では得られぬ言い知れぬ成就感とともに、人と人との強い絆が生まれる。だ

から劇づくりは辛い楽しい。

おわりに

士別市民劇場は設立から25年を迎えた。

札幌市周辺の演劇状況が、近年急速に活況を呈してきているのとは裏腹に、過疎地域における地域演劇活動は低迷状態を続けていると言わざるを得ない。

士別市民劇場は、劇団活動を維持するため、これまで劇団活動の枠に捉われず、さまざまな活動に積極的に参画してきた。しかし、結果として劇団活動自体に有益に作用するはずの多角的な活動が、劇団員のオーバー・ワークにつながり、本来の劇団活動へのエネルギーが消失してしまうというマイナス面を生み、劇団自体の再構築が必要な状況でさえある。幸い、開基100年町民劇場を契機として、美深町には町民劇団が誕生した。名寄市には数年前劇団なよろが結成され、下川町にも演劇サークルがある。

今後は、士別市民劇場が補助ロケットを噴射して姿勢の立て直しを図るとともに、小地域での劇団相互の連携を目指していくことが必要である。

ともに製作現場を往き来できるとい

う地理的範囲でのノウハウの交流や、道具・器材の貸し借りなど、相互に支援し合う関係を構築することが、それぞれの団体のステップ・アップに直結するはずであり、4団体の連携を核として、遠からず上川北部地域全体の演劇活動が活気に満ちたものになる日が到来することを信じて、ペンと腹筋の鍛錬に努めていこうと思う。